

ど二男一女が生まれた。しかし、妻が亡くなったので一九四四年金善永と再婚するようになった。そして、一九六三年二月八日金善永勳士と共に既成祝福を受けた。金善永勳士との間には瑤源(六〇〇〇双)、国際祝福、敬姫(一八〇〇双)、敬心(六〇〇〇双)、恩福が生まれた。私は「み旨のためにすべて捧げて何もなくなったら、天がまた下さる」と信じていた。聖主教団では牧師という名を持っていたが、統一教会に入教して長老という名を先生から与えられた。聖主教団の信仰をあきらめることができたのも、統一教会の原理が聖主教団の教理に勝るものであったからである。しかも、聖主教団の主張が統一教会によって実現されていたのである。

私の信仰はますます徹底して根を下ろしていった。聖書の黙示録は見ないで覚えるほど数回も読みこなした。『原理講論』も読み始めた。最後まで読んでしまっただけだった。聖主教団の時は説教を語るなど、牧会生活をもした。妻は私に対して「あまり優しくて人の悪口が言えない人、だれに何を言われても感謝し、いつも自分の足りなさを悔い改める人」と評価している。教会の仕事から離れて自分の家庭のことを考える余裕が出た時、すでに年寄りになっていた。

た。しかし、家で何もせずにいるわけにはいかなかった。賃貸住宅に住みながら石油商売を始めた。家庭訪問で注文を受けて配達するのが主な仕事だった。教会からも注文を受け、自転車に石油を乗せて忘憂里の時を往来した。そうして得たお金で子供たちを育て、生活を営んだ。

しかし、そのような生活も長続きしなかった。清涼里で街頭伝道に出て倒れてしまった。過労と高血圧にまでなった。子供たちはもちろん、私を知っている人たちは皆驚いた。その時まで一度も病院通いなどしたことがなかったからである。

先生が近くの教会に来られるときは、私の家にも寄られて、お米などを買ってお金を出してくださったこともある。その後、小さな雑貨屋を開いた。妻は忘憂里の時を往来しながら卸問屋から品物を買ってきた。

このように経済的には難しかったが、自力で生きるために最善を尽くしていった。統一教会が困難な草創期において、先生に侍ることができたということが、何よりも栄光たる生きがいであり、一番の思い出である。

(*この文は鄭寿源巡回師の証、各種資料、金善永勳士の証などを参考にして書かれたものです。)

特別寄稿

統一民族史観

この内容は一九九一年七月、当時韓国の世界日報の主宰であった韓国統一思想研究院の李相憲院長が同新聞の論説委員たちに講義したものです。近づいた南北統一に際しての、思想戦に對備して、北韓の唯物史観による民族史観を克服するための史観として、統一史観による民族史観を講義したものです。(文責編集部)



韓国統一思想研究院院長

이 상 헌
李 相 憲

一 民族史の始元

(一) 檀君神話

高麗時代に一然の『三國遺事』と李承休の『帝王韻記』が現れて以来、韓国の歴史書には、ほとんどの場合「檀君神話」が扱われてきたことは周知の事実です。

檀君神話によれば、天にいる桓因が彼の庶子である桓雄

の願いに気づいて、地上を見下ろしたら、三危太白が弘益人間にふさわしいところに見えたため、桓雄に、三千人の群れを率いて、天符印三個をもって地上に降りるように命じました。桓雄は父王の命を受けて、地上に降りた後、太白山の神檀樹の下に神市を開いて、この世を治めたのです。

その時、一匹の熊と一匹の虎が洞窟の中に住んでいたの

ですが、人間になりたいと桓雄に願いました。桓雄は、彼らに一握りのよもぎと、んにく二十個を与えて、百日間、洞窟の中に入って、日の光を見ないようにと命じました。虎は辛抱することができなかつたのですが、熊は二十一日間耐えることができたので、女（熊女）になりました。その後、熊女は、子供が欲しいと桓雄に願いましたが、その願いも聞き入れられて、身ごもるようになりました。そして子供が生まれ、成長して王になりました。それが檀君です。檀君は阿斯達に都を定めた後、天に祭祀をささげながら国を治めました。

以上が「檀君神話」の大筋ですが、長い間、学者たちの間で問題になってきたのは、はたしてこの神話をそのまま信じていることができるかということでした。天から人間の桓雄が下りたということ、熊から生まれた子が王様（檀君）になったということなどは、科学が発達した今日では、荒唐無稽な神話にはなつても、事実としては到底認めることはできないということです。したがって、実存人物としての檀君の存在も信じていけないと見る学者が少なくなかつたのです。ところが近年になって、一部の歴史学者たちの執拗な探求によって、桓因、桓雄、檀君などが実存



古朝鮮を開いたと言われる檀君王侯

るということ。言い換えれば、キリスト教の歴史観は神話の内容を歴史の始元と見なしているということです。神話とは、言語がまだ論理的に使われていない未開時代の、神を中心とした物語であり、現代人の理性から見ると、非科学的、非論理的、非理性的な内容を持っているのがその特徴です。エデンの園の人間墮落の物語が正にそれです。

話すことのできる蛇、善悪を知る木の果、生命の木、ヘビの誘惑、果物を取って食べたこと等、墮落に関する話がすべて非論理的、非科学的です。そして神の戒めを中心として展開されたものであり、確かに神話です。このような

人物であつたという証拠の資料が提示されるに至つたのです。そしてその年代も、約四三〇〇余年前ではなく、それよりはるか以前にさかのぼるといいます。

ここで統一史観の立場を明らかにしたいと思います。統一史観による民族史観はどこまでも神様の摂理の観点から見ると史観です。したがって統一民族史観は「四三〇〇余年前に、桓因の息子の桓雄が天から地上に降臨して、熊女と結婚して檀君を生み、檀君が古朝鮮を建国した」という筋書きを、歴史的事実のいかんに関係なく、神話と見ますが、その神話自体に神のみ旨が含まれていると見るのです。そしてその意味を解釈することが統一史観の見方なのです。

統一教会では、一般のキリスト教と同じく、人類歴史はアダムとエバがエデンの園でヘビの誘惑によって善悪を知る木の果を取って食べるることによって墮落し、神の怒りを受け、エデンの園から追放されたところから始まつたと見ます。したがって人類歴史を罪悪史と見るのです。

(二) 神話の解釈

ここで重要な事実を一つ明らかにしたいと思います。それはエデンの園の墮落の物語は、要するに一種の神話であつたという点です。統一史観の始元にもなつておられるのです。共産主義は神話を無意味で荒唐無稽な迷信であると見ていますが、決してそうではありません。神話には実に深い意味が含まれている場合が多いのです。原始時代や未開時代は、言語が論理的に未発達な状態であつたので、歴史的、宗教的、文化的要素が、簡単な用語や物語の中に未分化な状態で含まれている場合が多いのです。したがって、このような神話には必ず正しい解釈が必要です。

それはちよつと夢の解釈、つまり「夢うら」と同じです。精神分析学者のフロイトによると、夢うらを要する夢の内容には二つあるといひます。それが「表明内容」と「潜在内容」です。「表明内容」は夢を見た人が話す内容そのものですが、「潜在内容」は表明内容の背後に隠れた「夢の思想」すなわち「心理上の意味」をいひます。その隠れた意味を解くのが、正に夢うらだということ。夢にはこれから起きることに關するものがしばしばありますが、実際に夢の通りに起きたら、その夢うらは正しいということになるのです。

神話の場合も同じです。いくら非論理的だとしても、そこにはいろいろな深い意味が含まれているので解釈が要求されるのです。神様が与えてくださった神話はなおさらそうです。エデンの園についての神話は、神がモーセに与えられたものですが、その背後には深い意味が隠されています。今まで誰も、その意味を正しく解釈することができないでいたのですが、文鮮明先生が来られて初めて正しい解釈をされたのです。

ここで正しい解釈とは、正しい夢うらと同様なものです。その解釈通りの事実が実際にあったし、またその解釈に基づいて予測した内容が、そのまま聖書六六巻の全体を貫いて展開されていたのです。そして今までキリスト教で解決できなかった数多くの疑問が、文鮮明先生の解釈を適用すればすべて明確に解かれるのです（その詳細な内容は統一原理の中の墮落論と復帰原理に書かれています）。それだけでなく、今日までの人類歴史の方向性と今日の世界情勢の推移も、すべてエデンの園の物語に関する文鮮明先生の解釈に基づいた予測と一致しているのです。

(三) 檀君神話と再臨思想

び生命の木に帰ると表現しています。

聖書の六六巻がエデンの園に帰ってくる過程の記録であるといえます。エデンは楽園であり、喜びと感謝と歌声があふれ（イザヤ書五一・三）、もろもろの宝石で美しく飾られたところであり（エゼキエル二八・一二）、まさしく理想世界を意味するのです。結局、再臨思想は、失われた理想世界を復帰し、地上に実現するためにメシヤが再び降臨されるという思想です。

メシヤを迎える民族は選民ですが、選民とはどの民族でもなれるというものではありません。天を敬う敬天思想を持つ、善なる、義なる民族として、数多くの試練の中で、善と義を最後まで守りながら、道義文化を築いた民族でなければなりません。メシヤが来て、その民族文化を中心として統一文化の世界を実現するからです。したがって、そのような民族は苛酷な試練を繰り返し受ける受難の民とならざるを得ません。そのような選民として選ばれた民族が、初臨の時はイスラエル民族でした。それゆえイスラエル民族の歴史は、苦難の歴史、悲運の歴史にならざるを得なかったのです。ところが、そのような民族がイエスを十字架にかけたので、イエスは再臨の約束をして昇天されました。

檀君神話も同様に深い意味があると見ます。統一民族史観は、檀君神話を神が韓民族に与えた神話であると見るからです。檀君という名の王様が実在人物なのかどうかは学者の研究に任せて、ただその神話の中に隠されている神のみ旨を正しく解釈すればよいというのが統一民族史観の立場です。

結論からいえば、この神話は将来、韓民族にメシヤが再臨するということを示しているのです。メシヤは神の、真の真理と真の愛をもって、カインを屈伏させるアベルの立場で天から降臨されます。特に再臨の時には、雲に乗って降臨すると記されていますが、ここで雲とは多くの聖徒たちを意味します。

ところで聖書によれば、再臨のメシヤは新郎の立場で来られるのであり、救われるべき人類は新婦の立場でメシヤを迎えることになっています。そして五人のおとめが、あかりをもって、ひたすら主の来られるのを待っているという記録があります。そして再臨のメシヤは墮落しない第三のアダムとして来られるのです。このことはエデンの園を失ったアダムが、再びエデンの園に帰ることを意味します。ヨハネ黙示録はこのことを、生命の木を離れたアダムが再

(四) 檀君神話の解釈

以上、聖書の内容を中心に再臨思想と選民の受難史について述べたのですが、このすべての内容が、驚くべきことに、檀君神話の中に含まれているのです。言い換えれば、檀君神話を正しく解釈すると、上記の再臨思想と民族の受難思想が導かれるということです。それについて、檀君神話の内容を順次、紹介しながら説明します。

（庶子の桓雄が天符印三個をもって天から地上に降臨する）

庶子の桓雄はアベルの立場の再臨のメシヤを意味します。天符印は天符経と宝印ですが、桓雄が天符印三個を持って降臨するというのは、再臨のメシヤが真理のみ言と王権をもって来られることを意味します。天符経は真理のみ言を意味し宝印は王の宝印すなわち王権を意味します。ここで庶子の意味について説明します。神の摂理歴史には、側妻を神側に召して、天の側の王を生ませた例があります。ソロモン王を生んだバテシバがそのような女性です。彼女はダビデの側妻だったので、つまりイスラエル歴史上、最も偉大なるソロモン王は庶子でありながら、アベル側

(天側)の王だったので。神が側妻を通じて天の側の王を生ませたということは、エデンの園の物語と関連した歴史的な意味があります。ともかく桓雄が庶子だと明示したことは、天側すなわち神側の王であることを示しているのです。

〈三〇〇〇人の群れを率いて降臨する〉

このことは聖書の「雲に乗って主が来られる」という聖句と一致します。雲は聖徒の群れを表すものであり、再臨主は聖徒たちに迎えられながら現れるというのが「雲に乗って来られる」という意味です。この三〇〇〇人の三数は完成数を表す数であり、多くもなく少なくもない適切な数という意味です。文先生も教会の初期の迫害がひどい時に、「食口が三〇〇〇名あればよい」と言われたことがあります。

〈太白山と神檀樹〉

この太白山は太白の山、つまり大きくて白い山であり、神檀樹の檀とともに、明るい地を意味します。太白の「大いに白い」は「大いに明るい」ことを表します。ここで白

メシヤが再臨され、神国つまり天国を建設するという意味です。

〈熊は試練を耐え、虎は耐えることができない〉

檀君神話の中のこの部分をもって、一部の学者たちは檀君神話を「熊トテム」思想であると見ていますが、統一民族史観はそれとは全く異なった見方をしています。熊と虎は救われるべき地上の二種類の罪人を表すのです。罪人とは、墮落によって心霊が零落し、霊人体が全く成長しないという肉身だけの人間、つまり動物とかわりないような人間のことです。それで墮落した人間を表したのが虎と熊だったのです。罪人は誰でも救われなければならないのですが、救いを受けるためには一定の蕩滅条件を立てながら、迫害を受ける苦勞の道、つまり蕩滅路程を歩まなければなりません。ところで俗人の中には、苦勞をもいとわず、蕩滅の道を進む人もあれば、苦勞がいやで救いの道を拒んで世俗の生活に満足する人もいます。前者が熊で表示され、後者が虎で表示されたのです。時に虎はメシヤ降臨時の天使長の立場をも表しています。

は「しろい」の意味でなく「明るい」という意味です。白昼、白日などの白と同じ意味です。また檀は「バクダルの木」のことですが、この「ダル」は地を意味します。例えば今日も、陽地を「陽ダル」といい、陰地を「陰ダル」といっています。それで「バクダル」は明るい地、つまり光明の世界を意味します。ここで一つ記憶すべきことは、文字のなかつた古代の韓国の言葉は、しばしば吏読式で表記されたという事実です。つまり、先祖たちは古代韓国語の音や意味と同じ漢字を選び、それでもって韓国語を表記したということです。そうした観点から、太白山の太白や、神檀樹の檀は、吏読式表記として「明るい地」、「光明の世界」を意味します。これは結局、桓雄すなわちメシヤが真理と王権をもって地上に降臨し、永遠なる明るい世界、光明世界を立てることを意味するのです。

〈神檀樹の下で神市を開く〉

これは明るい地(バクダル=神檀)に神の国(神国)を立てるという意味ですが、神市は英語では City of Godです。City of God (civitas Dei) 『神国論』は、アウグスティヌスが著わした書名でもあります。すなわち、光明の地に

〈ひとにぎりのよもぎ(蓬)と、にんにく二十個をもって、三・七日、日光を避ける〉

これは熊として表示されたアベル側(善側)の人間やアベル側の民族は、一定の蕩滅路程を経なければ救いを受けられない、ということ象徴しているのです。よもぎの苦い味とにんにくの辛い味は、救いを受けるために味わわなければならない辛酸辛苦、つまり苦難を意味し、にんにく二十個と三・七日(二十一日)は、天が定めた蕩滅期間、すなわち罪を脱ぐために鍛練する期間です。

二十数や二十一数は、民族においては、二〇〇年や二一〇年、あるいは二〇〇〇年の蕩滅期間にもなります。また二十と二十一を合わせると四十一(四十)になります。この四十数もその拡大数である四〇〇や四〇〇〇とともに、やはり蕩滅期間を表します。それゆえ歴史(特に選民の歴史)には、二十、二十一、四十、二〇〇、二一〇、四〇〇、二〇〇〇、四〇〇〇などの二十数と四十数を中心とした撰理的期間がよく表れます。ところで四十は、しばしば四十二、四十三として使われることもあります。つまり四十二や四十三は四十であり、四二〇や四三〇は四〇〇であり、四三〇〇は四〇〇〇と同じなのです。

例えば、ヤコブは荒野で二十一年間苦勞した後、カナンに帰ってきました。モーセに率いられてエジプトを出たイスラエル民族は、荒野で四十年間苦勞してカナンに帰ってきました。イエスは荒野で四十日間断食をしながら、サタンの試練に勝ちました。またアブラハムからイエスまでは二〇〇〇年、アダムからイエスまでは四〇〇〇年です。

これらのすべての数が選民である韓民族にも適用されています。韓民族は日本の支配下で四十年（乙巳保護条約から解放まで）苦勞し、解放後の四十年間、共產主義の試練を受けました。それから三国時代（高句麗、百濟、新羅）以来、約二〇〇〇年後に韓国にメシヤが再臨されました。文先生も四十日間断食をされ、断食中に天上（靈界）に行つて、すべての教主、聖賢たち、そして神様から統一原理の公認を受けました。また一九六八年に国際勝共連合が創立されてから二十一年目の一九八九年に、共產主義体制が崩壊はじまりました。そして六・二五動乱が完全に阻止された一九五三年から四十年になる一九九三年は南北統一の年になると見ているのです。

統一教会の祝福家庭には四三〇双の価値があります。これは韓国の歴史四三〇〇年を蕩滅する意味をもった祝福家望意識）は、昔から韓民族の潜在意識の中に受けつがれてきたものです。このような意識が象徴的に表現されたのが、熊女が桓雄に願ったということです。

もちろん一部の学者たちが主張しているように、桓雄は実在人物だったのでしよう。しかし檀君説話を神話と見るのが統一史観の立場なので、神話の中の人物が実在人物であるか否かには関係なく、これはメシヤ再臨の理想の象徴的な表現であると見るのです。しかも熊は実際の熊ではなく、救いを待っている新婦としての人類、特に韓民族を象徴していると見るのです。

天から降りてきた王子と地上の女との逢いびきの話が、高句麗の建国に関する物語にも出てきます。天上において天帝の息子である解慕漱が地上に降りてきて、地上で待っていた柳花婦人に会って、朱蒙を生んだという神話がそうです。

また「春香伝」を見れば、春香があらゆる誘惑や脅威にも屈せず、最後まで貞節を守り、約束した新郎である李蒙龍を待ったといった内容ですが、これも天からの救いの手、つまり再臨メシヤである新郎を待っている、韓民族の体質的な待望意識の表現であると見るのです。

庭であったのです。その他にも二十数、二十一数とその拡大部分の期間を蕩滅期間とする撰理は無数にあります。そのような撰理を表す数が、にんにく二十個と、三・七日の暗黒の試練であったのです。檀君以来今日まで、四〇〇〇余年の間、特に三国時代以後今日まで、二〇〇〇余年の間、韓民族は北方（中国）と東方（日本）から数多くの侵入を受けました。しかし多くの被害を受けながらも、侵略軍を追い払い、試練に耐えてきました。そうしながらも敬天思想と道義精神を失うことがありませんでした。

（熊女が天から降りてきた桓雄に願う）

次は地上で待っていた熊が天から降りてきた桓雄に願つて、女になりたいと願ったということ、すなわち桓雄の教えにしたがって蕩滅条件を立てて女になったということ、撰理的観点から解釈します。

桓雄は天から降臨する救い主、すなわちメシヤを表します。それから地上で待っている熊女は、聖書の五人のおとめと同じく、そして新郎を待っている新婦と同じく、再臨の時の人類を象徴します。地上の人類が新婦の立場から新郎であられるメシヤを待ち望んでいるという待望思想（待

新羅のヌルジ王の時代の忠臣の朴堤上は、日本に行つて人質になった王の弟の末斯欣を新羅に帰らせるために、自分が日本軍に捕えられて、殺されました。彼の家内はそのことも知らないまま、待ちくたびれて石（望夫石）になつたというチスルリヨン岩の伝説があります。これも切に救いの手を待っている民族の待望意識の現れと見ていいでしょう。

二 歴史の性格

北韓の歴史解釈によれば、民族歴史は階級闘争の歴史だとなつていますが、これに対して統一民族史観による代案を提示します。韓民族の歴史は第一に、復帰歴史であり、第二に、蕩滅の歴史です。これを合わせて蕩滅復帰歴史ともいいます。

（一）復帰歴史

韓民族が選民であり、韓国にメシヤが再臨するということは、韓国の歴史が復帰歴史であることを意味します。先に、聖書の六十六巻はエデンの園から追放されたアダムが

再びエデンの園に、つまり出発の地点に帰る過程を記録した内容であるといいました。どのようにしてエデンに戻るかといえば、メシヤが墮落しないアダムの資格で再臨した後、生命の木の前に進むことよって、再び戻ります。エデンは楽園として喜びと感謝と歌声にあふれ、もろもろの寶石で飾られたところであり、理想世界を意味します。その世界が正に「アサダル（阿斯達……朝の地）」、「明るい地」の世界、つまり敬天、弘益（愛人）、光明の世界であり、檀君神話の通りの世界なのです。

このように、エデンから出て再びエデンに帰るというのが聖書に書かれている人類歴史であるために、人類歴史は復帰歴史になるのです。したがってエデンは人類歴史の出発点であると同時に、歴史が最終的に到達する目標地点でもあります。韓国史の場合も同じです。つまり韓国の歴史も、エデンの園に再び帰って行く復帰歴史なのです。そのエデンの園がまさしく檀君説話に出ているアサダル（朝の地）、明るい地、太白の世界、すなわち敬天、弘益（愛人）、光明の世界です。ところで檀君神話のアサダル、明るい地は、聖書のエデンの園とは違う点があります。それは檀君神話のアサダル、明るい地は「出てきたエデン」ではなく

した。そのため、歴史の出発点をはっきりさせる必要がありました。つまりアダムとエバがエデンの園から追放されるを得なかつた理由（墮落の事実）を明確にする必要があつたのです。

イエスがイスラエル民族の不信によつて十字架にかけられた後、神の摂理は新約時代に入りました。イスラエル民族はその時から選民の資格を失い、韓民族が再臨のメシヤを迎えるための第三の選民（単一民族としては第二選民）として立てられたのです。したがって韓民族に与えられた復帰の神話は、歴史の到達点としての復帰のエデンに関する物語だけで十分です。なぜならば、選ばれた第二の単一民族は第一選民が持っていた「追放されたエデン」「出てきたエデン」に関する物語をすでに受けついでいるという条件の上に立てられたからです。言い換えれば再臨のメシヤは、初臨のメシヤが成そうとして成すことのできなかつた、復帰の摂理だけを完成すればよいのです。したがって、韓民族に与えられたエデン（アサダル）の神話には、追放されたエデンに関する物語、つまり墮落に関する物語が省略されているのです。

「復帰するエデン」を意味するからです。

韓民族は三国時代から選民（第三の選民）として立てられました。これはイスラエル民族（単一選民）が持っていた「出てきたエデン」に関する神話の内容を受けついでいる、という条件のもとに立てられたことを意味します。すなわち新たに選民として立てられた単一民族には、墮落によつて追放されたエデンの話、言い換えれば「出てきたエデン」の話は不必要なのです。

周知の通り、檀君神話の典故は中国の二十五史の中の一つである「魏書」です。「魏書」は中国の魏国の王沈の著書であるとされています。彼は紀元三三四世紀の人物ですが、高句麗時代の人物であり、したがってこの神話の内容は紀元三世紀ごろ、高句麗から言い伝えられてきたものであると推測されます。言い換えれば、神がモーセにエデンの園の物語を教えられたように、高句麗の誰かに、このような神話を教えられたと見るのが統一思想の見方なのです。

モーセは旧約時代の人物です。旧約時代の神の摂理は、人類の始祖アダムとエバの墮落によつて追放されたエデンを復帰するために、メシヤを降臨させる準備をする時代で

文鮮明師夫人 韓鶴子女史の御言 理想世界の主役となる女性



B6判 47頁
定価200円

1992年9月24日 世界平和女性連合創立記念日本大会
1991年9月18日 統一教会全国信徒大会のメッセージ

お母様の御言が携帯に便利な小冊子になりました。「このたびの講演内容と昨年9月の全国信徒大会でのみ言、この2つを完全に消化し、自分のものとして身につけることを、私は切に願うものです」（世界統一国開天日の説教より）。み言を学び、実践して神様と真の父母様に実りをささげましょう。

光言社の園

ご用命は光言社発送センターへ ☎03-3384-4225 FAX03-3384-4374
光言社 千150 東京都渋谷区中田川町37-18 ☎03-3467-3105 FAX03-3468-5418